十六才の夏の頃

久留米市　　林　春男

昭和２０年７月１５日、海上挺身第３２戦隊同整備隊５００余名を乗せた軍用列車は広島駅を出発、本土防衛の第一線に立つべく一路展開地の宮崎へ向かった。戦隊は総員９２名、その軍服には船舶兵胸章と白地に水色の特殊艇乗員章とが胸間をかざっていた。戦隊長は弱冠２７才の陸軍少佐、出戦式前は大尉だった。この異例の昇進は死地に赴く者への軍の配慮なのか。本部小隊、第１小隊以下第９小隊まで１０箇小隊編成、学徒兵出身の各小隊長は全部新品少尉、隊員は特別幹部候補生の２期生と３期生の１０代後半の少年達８０名。整備隊は基地の設営や警備、船艇の整備など船隊の支援業務を担当し、船隊員が発進したあとは敵の上陸軍と地上戦を遂行するための武器を保有していた。

陸軍少尉の隊長以下４００余名、その多くは年長の召集兵であった。１人１艇の特攻艇は後送。関門トンネルを抜けて九州に入った頃から、空襲警報で列車は再三止まるようになった。宮崎に入ると、とうとう鉄道が不通になり、全員列車から降ろされた。大量の装備に食料は米俵から味噌醤油に清酒やビールまで携行しているから大変だ。装具はリヤカーに乗せて、梅雨も末期の雨中を行軍、戦隊長も歩く。昼は途中の駅々で小休止、夏とはいえ雨衣を通して下着から軍靴の中までずぶ濡れの状態で食事は立ったまま、夜の大休止ではそのまま物陰に横になるという日が何日か続いた。雨の降る日は敵機は飛ばない。その間に戦隊も整備隊も荷物を荷車や馬車を動員して積んで行く。

７月２０日、出発以来５日目に飫肥に到着、城内の学校に設営した。

そこには学童疎開で沖縄から来たという小学生達がいた。３月末、米軍の上陸に始まった沖縄戦も１００日余の激戦の末占領され、家族の安否もわからぬ不幸な子供達だった。

すでに連合艦隊もなく飛行機も我に無く、制海制空権共に敵手に在り、九州近海まで押し寄せた敵機動部隊から発進する艦載戦闘機グラマンの制圧下に昼間は全く動きのとれない状況で、ちょっとでも動くものがあればいきなり上空から急降下しては機銃掃射を浴びせるので、たまに動くトラックは木の枝で対空偽装してノロノロ動いていた。時には沖縄の陸上基地から飛来すると思われる双発双胴の陸軍機ロッキードの異様な機体も見た。ある朝、営舎外の厠に立った時、突然にバリバリと至近距離の機銃の音がした。ビックリ仰天。私は至近の防空壕に転げ込んだ。その瞬間頭上を飛越す敵戦闘機の操縦士の顔を見た。同時に周囲にはバラバラと薬きょうが落ちて来た。セブ島帰りの小隊長によると１２．７㎜の機銃弾に当たったら身体は四散するそうだ。

全部隊は山に入った。附近の住民も山に避難して夜は家に帰るようだ。その頃の宮崎は夜間行進中、友軍の戦車が突然に動き出したりして、沖縄失陥後来るべき本土決戦に備えて、最後の陸海軍の精鋭がここ南九州に集中充満した感だった。

遠くない日に米軍の上陸は必至の情勢であったから、そうなれば民間人も巻き込んで、沖縄以上に悲惨な戦闘が展開されただろう。

当時の日本人は皆狂気だった。軍は一億総特攻を叫ぶ、国民は死の渕に追い詰められていた。

その日は１１月１日、８０万の米軍が志布志湾岸と鹿児島吹上浜に上陸作戦決行の予定だったと後で知った。米軍上陸地点に対する日本軍の予想は当たった。吹上浜には第３１戦隊が展開していた。我々は志布志湾を死場所としていた。グラマンはその軽快な運動性で山かげから突然軍機で襲って来る。港の漁船も銃撃されるので漁に出られない。毎日塩味の汁に千切大根を浮べた食事ばかりになった。

ボーイング爆撃機によって日本の都市は灰になった。家族の安否がみんなの話題に上るようになると、私も北西の空を眺めては帰りたいなあ、どうせなら家で死にたいなあと思う事もあった。雨が降った時はタオルを持って屋外に出る。からだを洗う、これが入浴だ。

８月に入り新型爆弾で広島が壊滅した。訓練中の特幹３期生、４期生に犠牲者が出たとの報あり。長崎もやられた。大陸ではソ連軍がソ連満州国境を突破して進入してきた等情報が相ついだ。中でもソ連の参戦には大きな衝撃を受けたが、我々にはなす術もなく、ただ当面の敵に当たるだけと誓い合った。満州には姉一家がいた。

８月１５日終戦の報を受く。演習なし。終日敵機飛ばず。みんな泣いた。言葉もなかった。何日かして、鹿屋飛行場に米軍の先遣隊が進駐してきたとの情報に、戦隊全員爆雷を抱いて突っ込もうと切歯扼腕した。

ある日命令が出て軍隊手帳、典範令や操典、肌身はなさなかった認識票、官物私物一切焼却した。武器は作業隊が港外に投棄したそうだ。移動する途中海岸に並べた海軍の震洋艇を見て予科練の海上特攻隊も志布志湾岸に布陣していた事を知った。

終戦１カ月後の９月１５日都城に移動、部隊解散のあと鹿児島本線に乗った。途中通過した大牟田駅では、前日迄炭坑の捕虜収容所から解放された連合軍の捕虜達が列車に乗込んで、復員兵から腕時計を取り上げるなど暴行を働いていたとの話を聞いた。

１年余日前、万歳の歓呼と日の丸の旗で送られた久留米駅に降りた。市街より一段高い位置にある駅頭から見る光景は、一望千里の文字通り視界を遮る物は何もなく、中心部は全く焼土と化してポツンと焼け残っているのはデパートと郵便局の建物だけ。その間を重い復員荷物をかついで歩いた。翌日は猛烈な台風になった。何日かして、復員時に部隊本部から依頼された県出身者の復員名簿を福岡連隊区司令部に届けるため、西鉄電車に乗った。

思えば１０年を１年に凝縮した様な特幹生生活は終った。感受性の一番強烈な１５、６才の少年期には毎日が特異な体験だった。

太平洋戦争も長期化し、烈しく消耗されている初級幹部を養成補充する目的で、昭和１８年１２月陸軍に特別幹部候補生の制度が新設され、全国各地で採用試験が行われた。１５才から１９才の少年２万名が受験、３６００名の合格者のうち年長者から半数が１期生として入隊。４ケ月の訓練を経て大部分が海上挺身戦隊の要員となりフィリピン島、沖縄、台湾に出陣した。

そして特攻艇を駆って勇戦したが、その３分の２が戦死した。１期生卒業の後、残り１８００名が小豆島の特幹隊に入隊、２期生となった。４ケ月の基礎訓練の後船舶工兵、整備、通信、輸送、潜水等各分科に分かれ、それぞれ各実施部隊に転じたが戦局はますます緊迫し２期生も第一線に立たねばならぬ事態となり、その６０％が海上挺身戦隊の２次要員として江田島に集められ四式肉迫攻撃艇による特攻訓練に入った。武器は２５０㎏爆雷。２０年７月初旬、第３１戦隊から第４０戦隊までの各隊に出動が発令された。完全軍装で整列、船舶司令官臨席のもとに出戦式が行われた。

そのあと遺書を書くように命令され封筒に毛髪と共に収めた。営庭で一人づつ写真を撮られたが、それは戦死遺影用として使うのだと噂された。すべて記憶のかなた５０年前の１６才の夏だった。